古今和歌集上

九曜文庫

やまとうたはひとのこゝろをたねとし
てよろづのことのはとぞなれりける
世中にある人ことわざしげきものなれ
ばこゝろにおもふことを見るものきくもの
につけていひいだせるなり花になくう
ぐひす水にすむかはづのこゑをきけ
ばいきとしいけるものいづれかうたをよ
まざりけるちからをもいれずしてあ
めつちをうごかしめに見えぬおに
神をもあはれとおもはせおとこをんな

のなかをもやはらげたけきものゝふの
心をもなぐさむるは歌なりこのうた
あめつちのひらけはじまりける時よりいで
きにけり
あまのうきはしのしたにてめがみをがみと
なりたまへることをいへるうたなり
しかあれども世につたはることはひさかた
のあめにしてはしたてるひめにはじまり
したてるひめとはあめわかみこのめなり
せうとの神のかたちをかたににうつりて
かゝやくをよめるえびすうたなるべしこれらは
もじのかずもさだまらずうたのやうにもあらぬことゞもなり
あらかねのつちにしてはすさのをの
みことよりぞおこりけるちはやぶる

神世にはうたのもしもさたまらすすなを
にしてことの心わきかたかりけらし
人の世となりてすさのをのみことよ
りそみそもしあまりひともしは
よみける
すさのをのみことはあまてるおほん神の
このかみなり女とすみたまはんとていつ
ものくにゝみやつくりしたまふ時にその所にやいろ
の雲のたつをみてよみたまへるなり　やくもたつい
つもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを
かくてそ花をめて
とりをうらやみかすみをあはれひ露を
かなしふ心ことはおほくさまさまに
なりにけるとをき所もいてたつ

あしもとよりはしまりて年月をわ
たりたかき山もふもとのちりひちより
なりてあまくもたなひくまておひ
のほれることくにこの歌もかくのことく
なるへし　なにはつのうたはみかとの
おほむはしめなり
おほさゝきのみかとなにはつにてみこときこえける時
東宮をたかひにゆつりて位につきたまはて三
とせになりにけれは王仁といふ人のいふかり思ひてよみ
てたてまつりける歌なりこの花は
梅の花をいふなるへし
あさか山のことはゝ
うねめのたはふれよりよみて
かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに国の
つかさことおろそかなりとてまうけなとしたりけれと

けれとすさましかりけれはうねめなりける女の
かはらけとりてよめるなり これにそおほきみの心とけにける
このふたうたはうたのちゝはゝのやうにてそ
てならふ人のはしめにもしける そもそも
うたのさまむつなり からのうたにもかく
あるへき そのむくさのひとつにはそへうた
おほさゝきのみかとをそへたてまつれる
うた

難波津にさくやこの花冬こもり
いまは春へとさくやこの花と
いへるなるへし

ふたつにはかそへうた
さく花におもひつくみのあちきなさ
身にいたつきのいるもしらすて
これはたゝことにいひて物にもたとへなともせぬもの也
といへるなるへし
この哥いかにいへるにかあらん そのこゝろえかたし
いつゝにたゝことうたといへるなん これにはかなふへき
みつにはなすらへうた

君にけさあしたの霜のおきていなは
こひしきことにきえやわたらん
これはものにもなすらへて それかやうになんあるとやうにいふなり
といへるなるへし
この哥よくかなへりともみえす たらちねのおやのかふこの
まゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて
かやうなるやこれにはかなふへからん
よつにはたとへうた

我恋はよむともつきしありそ海の
はまのまさこはよみつくすとも
これはよろつの草木とりけたものにつけて心を見するなり
といへるなるへし
この哥はかくれたる所なんなきされとはしめのそへ哥
とおなしやうなれはすこしさまをかへたるなるへし
まことの哥の心なれはくふうをもせすといひてかへたり
あふさかやあふみのうみのうちいてなやかなへし華
いつゝにはたゝことうた
いつはりのなき世なりせはいかはかり
人のことのはうれしからまし
これはことのとゝのほりたゝしき
といへるなるへし
といふなりこの哥のこゝろさらにかなはす
とめうたとやいふへからん山さくらあ
くまて色をみつるかな花ちるへくも世ふかぬよに

むつにはいはひうた
このとのはむへもとみけりさきくさの
みつはよつはにとのつくりせりと
いへるなるへし
これは世をほめて神につくるなり
このうたいはひうたとはみえすなん
かすかのにわかなつみつゝよろつよを
神そしるらんこれらやすこしかなふへからんおほよ
そむくさにわかれん事はえあるましき事になん
たかつはりしことなりけん
いまの世中いろにつき
人のこゝろ花になりにけるより
あたなるうたはかなきことのみいてくれは
いろこのみの家にむもれ木の人
しれぬことゝなりてまめなるところには

それはたゝさかふにてみすつからみるなりを
かゝ沈なりふかりそのたしめをとこへも
うらへくらんおもぬいふし人の世にれけり
と春の花の朝秋の月の夜とに
さすかに人〻とめしてことにつきゆく
うらことならん多そまつしめたまふおもそ
むとそふとくまこりならん断り侍とも
かつは月をおもふとてしるへなき身やなんあり
ゐとけこてろくとみ多まひてさ
うしろなりけしろしめしきん

しるあるのこふかゝすゆくまいりける
へゆくさ山まかけてこゝろをうつしよ
ろこひ身ふともれ多のしひふよかまる
ぬしれくもり我よそへてんとこひまゐ
むかしのねよともとしるのひたるゆこす
のそれまゆもおひとも乃風つりた
わしおとこ山のむかしをたりひそて
みそなへしれ色ことさとくうつるをも
うらそいひてそなくゆめけるゆきゝ春の
かくらに花のちる紙見ん秋の夕暮よ

木乃葉のおつるをきゝあるはとしことにかゝ
みのかけにみゆる雪となみとをなけ
き草の露水乃あはを見てわか身
をおとろかしあるはきのふはさかえおこり
て時をうしなひ世にわひしたしかりし
もうとくなりあるは松やまのなみをか
け野中の水をくみ秋はきのした
葉をなかめあかつきのしきのはねかき
をかそへあるはくれ竹のうきふしを
人にいひよし野川をひきて世中

をうらみきつるに今はふしのやまも
けふりたゝすなりなからのはしもつ
くるなりときく人はうたにのみそこゝろを
なくさめけるいにしへよりかくつたはるう
ちにもならの（文武天皇）御時よりそひろまりに
けるかの御世や歌のこゝろをしろしめ
したりけむかの御時におほきみ
つのくらゐかきのもとの人まろなん
うたのひしりなりけるこれは君も人も
身をあはせたりといふなるへし　秋乃

ゆふへたつた川になかるゝもみちをはみかと
のおほむめにはにしきと見たまひ
春のあしたよしのの山のさくらは人
まろか心には雲かとのみなむおほえける
又山のへのあか人といふ人ありけり
哥にあやしくたへなりけり人まろ
はあか人かかみにたゝむことかたくあか
人は人まろかしもにたゝむ事
かたくなむありける　ならの御門の御哥
たつた川もみちみたれてなかるめり
わたらは錦中やたえなむ　人まろ　梅の花そ
れとも見えす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは
ほのほのとあかしの浦の朝きりにしまかくれゆく舟をしそ
思ふ　赤人　春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつか
しみひとよねにける　わかのうらにしほみちくれはかたをなみ
あしへをさしてたつなきわたる
を〻きて又すくれたる人も呉竹の世
〻にきこえかたいとのよりよりにたえす
そありけるこれよりさきの哥をあつめて　乃さ不審未決
なん万えうしうとなつけられたりける
こゝにいにしへのことをもうたのこゝろ
をもしれる人わつかにひとりふたりな
りきしかあれとこれかれえたるところ
えぬところたかひになんあるかのみ時より

うつろしハりしと世おほかり世ハとつき
かなんなりまけりいかしへ乃うすをも
うつせもしまつひとよむ人ハおほくし侍
いまこのことゝいふにほさしてぬる多れ
人とハ多やうきやかなましいますそ
乃かりにちりれ世乃り我の心さしてうつ
人ハあれかし僧正遍照ハ命乃ほさしき
えられしともゆくとてなしそとへし
思ようけるをしかをとりんくいさつて有心
とうとうすかとし
あさみとりいとよりか
けてしら露をたまにも

ぬける春の柳かなちかき葉乃みとりにしゆきぬるそ
かふかは露を玉とおさむしほか鑿まてむまよりおち
てあそれよめておもてつりそ
女郎花もおちふさと人よそふか
あつまりしれなり
むしハその心あまりてしと葉多しもと志
かめる花れなくてまちひのてまつると
月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつ
しもとの身にしておほかたハ月をもめてし
これそこのつもれハ人乃老となるかの詠めをも
ろかにゆとろめてしいやそらなかとおりまほ乃かな
物むやの庭をひくいと葉ハうつしみえて
そのほさし身ふれかすいつもわさ人なる
よれきぬきてんかし
吹からに秋乃草木乃志をるれハ
むへ山かせをあらしといふらん深草乃みかとの御國忌ハ
草ふかきさすまれ多ふかけくしてうら日乃くまつらふ

おなし宇治山の僧きせんは詞かすかに
してはしめをはりたしかならすいは
ゝ秋の月を見るにあかつきの雲に
あへるかことし　わかいほはみやこのたつみしかそすむ　よをうち山と人はいふなり
よめるうたおほくきこえねはかれこれを
かよはしてよくしらす次をのゝこまちは
いにしへのそとほりひめの流なりあはれ
なるやうにてつよからすいはゝよき女の
なやめるところあるにゝたりつよから
ぬはをうなのうたなれはなるへし　おもひつゝぬれはや

人の見えつらんゆめとしりせはさめさらましを　色みえて
うつろふものは世中の人の心の花にそありける　わひ
ぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそ
思ふ　そとほりひめのうた　わかせこかくへきよひなりさゝかにの
くものふるまひかねてしるしも　大伴のくろぬしは　そのさまい
やしいはゝたきゝおへる山人の花のかけに
やすめるかことし　おもひ出て恋しき時ははつかりの　なきてわたると人はしらすや
かゝみ山いさたちよりて見てゆかん　としへぬる身は老やしぬると　このほかの人々その
名きこゆる野へにおふるかつらのはひ
ひろこり林にしけき木の葉のことく
おほかれとうたとのみ思ひてその
さましらぬなるへしかゝるにいますへらき

あめのしたしろしめすことよつのとき
こゝのかへりになむなりぬるあまねきおほむ
うつくしみのなみやしまのほかまてなかれ
ひろきおほむめくみのかけつくは山の
ふもとよりもしけくおはしまして
よろつのまつりことをきこしめすいと
まもろもろのことをすてたまはぬあま
りにいにしへのことをもわすれしふ
りにしことをもおこしたまふとて
いまもみそなはしのちの世にもつたは

れとて延喜五年四月十八日に大内記き
のとものり御書のところのあつかりきの
つらゆきさきのかひのさう官おふし
かうちのみつね右衛門の府生みふのた
ゝみねらにおほせられて万えうしふに
いらぬふるきうたみつからのをもたて
まつらしめたまひてなむそれかなか
にむめをかさすよりはしめてほとゝきす
をきゝもみちををりゆきを見るに
いたるまて又つるかめにつけてきみを

おりひ人をもいとひ秋には夏草を
かくつまとこひあふさか山いりて
あむけといのちかけし春夏秋冬
もいしぬくさくのうことなんえらせ
たまひけるをへくみしこえしくまれふ
つきてこさんわかよしいふくろみ
きこひあつめえらつまて山志てみれ
ささんすも海のまなくのみすおほ
くたりつまぬまをいさいおほかた川の世に
なからしみもこころすなしまいれて

かくなつよろこひのそそかつしへ我まこ
まくてしも葉ちるの花よりひさく
なくしてむなしきよのみ秋のよれ
かられとうこてましい人の見てふ
おそろしかはうしこのんふかられりへと
あふひく雲れそら井なくしておき
柳しは流しゆおならたこみの世よれかしく
むかしまてくさめのみれ時よりあつさなん
よわこひめる人まれあまくなりふ通
とらくこのしとさてまいらう那 さとひ

かゝりしところまたのしひかしひゆ
きのふもこのうらみありしあらしやはげ
やまかぜのいとゝはげしく松の葉のちりう
せたえしてまちきみゆるあかくはさ
まろまろのはなやひさしをとて御まら
いとこのはさとしまことのかとゑさ
らむ人はおかしきの月をみるうしとれ
いよしへとあふさきてつま紙こひはし
めうき

古今和歌集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

としの内に春はきにけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはん

はるたちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいつこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

二条のきさきの春のはじめの御うた

雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず

よみ人しらず

梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまだ雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる

素性法師

春たてば花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらず

よみ人しらず

心ざしふかくそめてしをりければ消あへぬ雪の花と見ゆらん

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちきみ

まうち君の許へ

二条のきさきのとう宮のみやすむ
ところときこえける時正月三日おまへに
めしておほせことあるあひたに日はて
りなからゆきのかしらにふりかゝりける
をよませ給ひける　文屋やすひて

春の日のひかりにあたる我なれと
かしらの雪となるそわひしき

雪のふりけるをよめる
きのつらゆき

霞たちこのめも春の雪ふれは花なき里も花そちりける

はるのはしめによめる
ふちはらのことなお　言直

春やとき花やおそきとききわかむ鶯たにもなかすもあるかな

春のはしめのうた　たゝみね

春きぬと人はいへとも鶯のなかぬ限はあらしとそ思ふ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた
源まさすみ　当純　近院右大臣男

谷風にとくる氷のひまことに打出る波や春の初花

紀とものり

花の香を風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

大はらの里

鶯の谷より出る声なくは春くることを誰かしらまし

左京棟梁　業平朝臣男

春たてと花もにほはぬ山里はものうかる音に鶯そなく

題しらす　よみ人不知

野辺ちかく家ゐしせれは鶯のなくなる声はあさな〳〵きく

かすか野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

み山には松の雪たに消なくに都は野への若なつみけり

春日野のとふひの野守出てみよ今いくかありて若なつみてん

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらは若なつみてん

仁和のみかとみこにおましましける時に

人にわかなたまひける御うた

君かため春の野に出て若なつむ我衣手に雪はふりつゝ

哥たてまつれとおほせられし時よみて

てたてまつれる

つらゆき

かすかのゝ若なつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

題しらす　在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ

寛平御時きさいの宮の哥合によめる

源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれとおほせられし時よみ
てたてまつれる　　つらゆき

わかせこか衣はるさめふることに野への緑そ色まさりける

青柳のいとよりかくる春しもそみたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

浅みとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

題しらす　　よみ人不知

もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥哉

かりの声をきゝてこしへまかりける人を
思ひてよめる

凡河内躬恒

春くれは雁かへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

帰雁をよめる　　伊勢

春霞たつをみすてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

題不知　　よみ人しらす

折つれは袖こそ匂へ梅花ありとやこゝに鶯のなく

色よりも香こそあはれと思ほゆれたか袖ふれし宿の梅そも

宿ちかく梅花うゑしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり

梅花たちよるはかりありしより人のとかむるかにそしみぬる

よみ人しらす

東三条のおほいまうちきみ（源常 嵯峨源氏 左大臣 左大将 斉衡元年薨 卅四）

鶯のかさにぬふてふ梅花をりてかさゝむおいかくるやと

素性法師

よそにのみあはれとそみし梅花あかぬ色かはをりてなりけり

梅花をゝりて人におくりける

とものり

君ならて誰にかみせむ梅花色をもかをもしる人そしる

くらふ山にてよめる

貫之

梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける

月よに梅花をゝりてと人のいひけれはおりてよめる

みつね

月夜にはそれともみえす梅花かをたつねてそしるへかりける

春のよ梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそみえねかやはかくるる

はつせにまうつることにやとりける人の家に

ひさしくやとらてほとへてのちにいたれりけれは

いたれりけれはかの家のあるしかくさたかに
なんやとりハあるといひいたして侍けれハ
そこにたてりける梅乃花を折りて
よめる　　つらゆき
人ハいさ心もしらすふるさとハ花そむかしの香ににほひける
水乃ほとりに梅の花さけりけるをよ
める
伊勢
春ことになかるゝ川を花とみておられぬ水に袖やぬれなん
年をへて花の鏡となる水ハちりかゝるをやくもるといふらん
家にありける梅乃花のちりけるをよめる
つらゆき
くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
梅か香を袖にうつしてとゝめては春ハすくともかたみならまし
よみ人不知
素性法師
ちるとみてあるへき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる
題しらす
よみ人不知
散ぬとも香をたにのこせ梅花恋しき時の思ひ出にせん
人の家にうへたりけるさくらの花

さきはしめたりけるを見てよめる
つらゆき
ことしより春しりそむる桜花ちるといふことはならはさらなん
題しらす　よみ人しらす
山高み人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我みはやさん
又はさとゝをみ人もすさめぬ山さくら
山桜わか見にくれは春霞峯にも尾にも立かくしつゝ
清和母后明子　昌泰三年五月廿三日崩　七十二　太皇太后　文徳后　忠仁公女
そめとのゝきさきのおまへに花かめに
さくらの花をさゝせ給へるを見てよ
める
さきのおほきおほいまうちきみ　忠仁公　摂政太政大臣

年ふれはよはひは老ぬしかはあれと花をし見れは物思ひもなし
なきさの院にて桜を見てよめる
在原業平朝臣
世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし
題しらす　よみ人不知
石はしる滝なくもかな桜花たおりてもこんみぬ人のため
山のさくらを見てよめる
素性法師
見てのみや人にかたらん桜花手ことにおりて家つとにせん
花さかりに京を見やりてよめる

見渡せハ柳桜をこきませて都そ春の錦なりける

さくらの花のもとにて年の老ぬること
となけきてよめる

きのとものり

色も香もおなし昔にさくらめと年ふる人そ
あらたまりける

をれるさくらをよめる

つらゆき

誰しかもとめて折つる春霞立かくすらん山の桜を

哥たてまつれとおほせられし時
よみてたてまつれる

桜花咲にけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

とものり

みよしのの山へにさける桜花雪かとのみそあやまたれける

やよひにうるふ月ありける年よみける

伊勢

桜花春くははれる年たにも人の心にあかれやハせぬ

さくらの花のさかりにひさしくとはさり
ける人のきたりける時によみける

よみ人しらす

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し　　業平朝臣

けふこすハあすハ雪とそふりなましきえすハありとも花と見ましや

題しらす　　よみ人不知

ちりぬれハこふれとしるしなきものをけふこそ桜おらハおりてめ

おりとらハおしけにもあるか桜花いさやとかりてちるまては見ん

きのありとも

桜色に衣ハふかくそめてきん花のちりなん後のかたみに

桜の花のさけりけるを見にまうてきたりける人によみておくりける

みつね

我宿の花見かてらにくる人ハちりなん後そこひしかるへき

亭子院哥合の時よめる

伊勢

見る人もなき山さとの桜花外のちりなん後そさかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらず　　　　よみ人しらず

春霞たなびく山の桜花うつろはんとや色かはりゆく

まてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさまし

残りなくちるぞめでたき桜花ありて世中はてのうければ

この里に旅ねしぬべし桜花ちりのまがひに家ぢわすれて

うつせみの世にもにたるか花桜さくと見しまにかつちりにけり

僧正へんぜうによみておくりける

これたかのみこ　惟喬　文徳第一　母従四位上紀種子名虎女

桜花ちらばちらなんちらずとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて桜の花のちりけるをみてよめる　　そうく法師

桜ちる花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする

桜の花のちりけるをみてよみける　　そせい法師

花ちらす風のやどりは誰かしる我にをしへよゆきてうらみん

うりんゐんにて桜の花をよめる　　そうく法師

いざ桜我もちりなん一さかりありなば人にうきめみえなん

あひしれりける人のまうてきてかへりに
けるのちによみて花にさしてつかはし
ける　　　　　　　　つらゆき
ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらはちらなん
やまのさくらを見てよめる
春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへき物を
心ちそこなひてわつらひけるときにかせ
にあたらしとておろしこめてのみ侍り
けるあひたにおれるさくらのちりかたになれり
けるを見てよめる
藤原よるかの朝臣　典侍因香　寛平延喜
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり
東宮雅院（待賢門内坐于東）にてさくらの花のみかは水にちりて
なかれけるを見てよめる
すかののたかよ
枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあはとこそなれ
さくらの花のちりけるをよみける
つらゆき
ことならはさかすやはあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし
桜のことくとくちる物はなしと人のいひけれは

よめる

桜花とくちりぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹あへぬ

さくらのちるをよめる

きのとものり

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん

春宮のたちはきのぢんにて桜の花のちるを
よめる

藤原のよしかせ　好風

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん

桜のちるをよめる

凡河内躬恒

雪とのみふるだにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん

ひえにのぼりてかへりまうできてよめる

貫之

山たかみ見つゝわがこし桜花風は心にまかすべらなり

題しらず

一本 大伴黒主

春雨のふるは涙か桜花ちるをおしまぬ人しなけれハ

亭子院歌合歌

つらゆき

桜花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

ならのみかどの御うた　平城天皇也　大同天子

ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらず花はさきけり

春の歌とてよめる

よしみねのむねさだ

花の色ハ霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

そせいほうし

花の木も今ハほりうへし春たてはうつろふ色に人ならひけり

題しらす　よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里ハあらしさけるさかさる花の見ゆらん

はるの歌とてよめる

貫之

三わ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん

うりんゐんのみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる

そせい

いさけふハ春の山へにまちりなむくれなはなけの花のかけかハ

春の歌とてよめる

いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすハ千世もへぬへし

題しらす

よみ人しらす

春ことに花のさかりハありなめとあひ見ん事ハ命なりけり

花のことよのつねならハすくしてし昔ハまたもかへりきなまし

吹風にあつらへつくる物ならハこのひともとハよきよといはまし

まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

咲花はちくさなからにあたなれと誰かは春を恨はてたる

春霞色のちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

在原もとかた

霞立春の山へはとほけれと吹くる風は花の香そする

うつろへる花をみてよめる

みつね

花見れは心さへにそうつりける色にはいてし人もこそしれ

題しらす　よみ人しらす

鶯のなく野へことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手たにふれたる

典侍洽子朝臣　寛平延喜掌侍 典子東南別当

散花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に歌合せん

とてしける時によみける

藤原後蔭　蔵人右少将 中納言有穂男

花のちることやわひしき春霞たつたの山の鶯のこゑ

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへハおのか羽風にちる花を誰におほせてこゝら鳴らん

うくひすの花の木にて鳴をよめる

みつね

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす　よみ人しらす

こまなめていさみにゆかん故郷ハ雪とのみこそ花ハちるらめ

ちる花をなにかうらみん世中に我身もともにあらん物かハ

小野小町

花乃色ハうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

仁和乃中将のみやす所の家に歌合せん

としける時によめる　そせい

惜と思心ハいとによられなんちる花ことにぬきてとゝめん

しかの山こえに女のおほくあへりけるによみ

てつかはしける　つらゆき

梓弓春の山へをこえくれハ道もさりあへす花そちりける

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

春乃野にわかなつまんとこしものをちりかふ花に道ハまとひぬ

山寺にまうてたりけるによめる

やとりして春乃山へにねたる夜ハ夢の内にも花そちりける

寛平の御時きさいの宮の歌合乃うた

吹風と谷の水としなかりせハ深山かくれの花をみましや

志賀よりかへりけるをうなとも花山にいりて

藤の花のもとにたちよりてかへりけるに

よみておくりける　僧正遍昭

よそにみてかへらん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも

家にふちの花さけりけるを人のたちとまりて

見けるをよめる　みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすきかてにのみ人のみるらん

題不知　よみ人しらす

今もかもさきにほふらん橘のこしまのさきの山吹の花

春雨ににほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹ハあやなゝさきそ花見んとうへけん君かこよひこなくに

よしの川のほとりに山吹のさけりけるを

よめる　つらゆき

吉野川岸の山吹ふく風にそこのかけさへうつろひにけり

題しらす　よみ人しらす

かはつなくゐての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この哥ハある人のいはく

たちはなのきよともか也　清友　贈太政大臣　嵯峨后父

春哥とてよめる　そせい

おもふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしか

はるのとくすくるをよめる

みつね

梓弓はるたちしより年月のいるかことくも思ほゆるかな

やよひに鶯の声のひさしうきこえさりける

をよめる

貫之

なきとむる花しなけれは鶯もはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに

山川より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

春をおしみてよめる

もとかた

おしめともとゝまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

おきかせ

声たえすなけや鶯ひとゝせにふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける

女ともを見てよめる

みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日あめのふりけるに
ふちの花をゝりて人につかはしける
なりひらの朝臣

ぬれつゝそしひてをりつる年の内に春はいくかもあらしと思へは

亭子院の哥合に春のはてのうた
みつね

けふのみと春を思はぬ時たにも立ことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　よみ人しらす

我宿の池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

この哥ある人のいはく柿本人丸か也

卯月にさける桜をみてよめる　紀としさた

あはれてふことをあまたにやらしとや春にをくれてひとり咲らむ

題しらす　よみ人しらす

さ月まつ山郭公うちはふきいまもなかなむこそのふるこゑ

伊勢

五月こハなくもふりなん時鳥まだしき程の声をきかばや

よみ人不知

さ月まつ花たちはなのかをかけハ昔の人の袖のかそする

いつのまにさ月きぬらん葦引の山時鳥今そなくなる

けさきなきいまた旅なる時鳥花橘にやとはからなん

をとハ山をこえける時に郭公のなくをきゝてよめる

きのとものり

をとハ山けさこえくれハ時鳥梢はるかに今そなくなる

ほとゝきすのはしめて鳴けるをきゝて

そせい

時鳥初声きけハあちきなくぬしさたまらぬ恋せらるはた

ならのいそのかみてらにて郭公のなくをよめる

いそのかみふるき都の時鳥声はかりこそむかしなりけれ

題しらす

よみ人不知

夏山になく時鳥心あらハ物思ふ我に声なきかせそ

郭公なく声きけハわかれにしふるさとさへそこひしかりける

時鳥なかなく里のあまたあれハ猶うとまれぬ思ふものから

思ひ出るときはの山の時鳥から紅のふり出てそなく

声ハして涙ハみえぬ郭公わか衣手のひつをからなん

足引の山郭公おりはへて誰まさるとねをのみそなく

今更に山へかへるなほとゝきすこゑのかきりはわか宿になけ

みくにのまち

やよやまて山郭公ことつてむ我世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

紀とものり

五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかくなきていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしもすきかてになく

大江千里 参議音人男

やとりせし花橘もかれなくになと郭公こゑたえぬらん

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれは郭公なく一こゑにあくるしのゝめ

みふのたゝみね○

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山郭公

紀秋岑 子細不見 [illegible]

夏山に恋しき人やいりにけんこゑふりたてゝなく郭公

題しらす

よみ人しらす

こその夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

かくこゑすのあるとこそてもあつ

つらゆき

五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとかよたゝなくらん

さふらひにておのこともさけたうへけるにめして郭公まつうたよめと侍けれはよめる

みつね

郭公声もきこえす山ひこはほかになくねをこたへやはせぬ

山に郭公のなきけるをきゝてよめる

つらゆき

郭公人まつ山になくなれは我うちつけに恋まさりけり

はやくすみける所にて郭公のなきけるをきゝてよめる

忠岑

むかしへや今も恋しき郭公ふるさとにしもなきてきつらん

郭公のなきけるをきゝてよめる

みつね

時鳥我とはなしに卯花のうき世中になきわたるらん

はちすの露をみてよめる

僧正遍昭

はちすはのにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく

月のおもしろかりける夜暁かたによめる

ふかやふ

夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

となりよりとこなつの花をこひにおこせ
たりけれはおしみてこのうたをよみて
つかはしける　みつね

ちりをたにすゑしとそ思ふさきしよりいもとわかぬるとこ夏

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふそらのかよひちはかたへすゝしき
風やふくらん

古今和歌集巻第四

秋歌上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかに見えねとも風のおとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかものかはらに
かはせうえうしけるともにまかりてよめる
つらゆき

河風のすゝしくもあるかうちよする波とゝもにや秋はたつらん

題しらす　よみ人しらす

わかせこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつ風

けふこそは今宵ひこほしのまちわたるはそのよとて秋風の吹
にし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし
久方のあまのかはらのわたしもりきみわたりなはかちかくしてよ
天河もみちを橋にわたせはや七夕つめの秋をしもまつ
こひ〳〵てあふよはこよひ天川霧立わたりあけすもあらなん
寛平御時なぬかの夜うへにさふらふをのこ
ともうたたてまつれとおほせられける
時に人にかはりてよめる
とものり
あまの河あさせ志ら波たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

おなし御時きさいの宮の歌合のうた
藤原おきかせ
契りけん心そつらき七夕の年にひとたひあふはあふかは
なぬかの日の夜よめる
凡河内みつね
年ことにあふとはすれと七夕のぬるよのかすそすくなかりける
七夕にかしつるいとのうちはへて年のをなかく恋ややわたらん
題しらす
そせい
こよひこん人にはあはし七夕のひさしき程にかはりもこそすれ（まちイ）
なぬかの夜のあか月によめる

源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖そひちぬる

八日の日よめる　　みふのたゝみね

けふよりは今こん年のきのふをそいつしかとのみまちわたるへき

題しらす　　よみ人しらす

木のまよりもりくる月の影見れは心つくしの秋はきにけり

大かたの秋くるからに我身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり

是貞ハ　仁和帝第二　宇多帝兄　母同寛平

これさたのみこの家の哥合のうた

いつはとは時はわかねと秋の夜そ物思ふことのかきりなりける

かむなりのつほに人々あつまりて秋の

夜をおしむ哥よみけるついてによめる

みつね

かくはかりおしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらん人さへそうき

題しらす　　よみ人しらす

白雲にはねうちかはしとふ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし鴈金のきこゆる空に月わたる見ゆ

これさたのみこの家の哥合によめる

大江千里

月見れは千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

たゝみね

久方の月の桂も秋はなを紅葉すれはや照まさるらん

月をよめる　　在原元方

秋のよの月の光しあかゝれはくらふの山もこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きりきりすの
鳴けるをきゝてよめる

藤原たゝふさ

蛬いたくな鳴そ秋のよのなかき思ひは我そまされる

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらす鳴虫はわかことものやかなしかるらん

題しらす　　よみ人不知

穐萩も色つきぬれは蛬我ねぬことやよるはかなしき

秋のよは露こそことにさむからし草村ことに虫のわふれは

君忍ふ草にやつるゝふるさとは松虫の音そかなしかりける

秋の野に道もまよひぬ松虫の声する方に宿やからまし

秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていさとふらはん

もみちはのちりてつもれる我宿に誰を松虫こゝら鳴らん

日くらしの鳴つるなへに日はくれぬと思ふは山の影にそありける

ひくらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし

はつかりを讀る　在原元方

待人にあらぬものから初雁のけさ鳴こゑのめつらしき哉

是貞のみこの家の歌合のうた

とものり

秋風に初かりかねそきこゆなる誰か玉つさをかけてきつらん

題しらす　よみ人不知

わか門にいなおほせ鳥の鳴なへにけさ吹風に雁はきにけり

いとはやもなきぬるかりか白露のいろとる木々ももみちあへなくに

春霞かすみていにし雁かねは今そ鳴なる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかね鳴なへに萩の下葉もうつろひにけり

この哥はある人のいはく人丸也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあけてくる舟はあまのとわたる雁にそありける

かりの鳴けるをきゝてよめる

みつね

うき事を思ひつらねてかりかねの鳴こそわたれ秋のよな／＼

これさたのみこの家の歌合のうた

多くみよ

山里ハ秋ともしらしと思ひしを志かの鳴ねにめをさましつゝ

よき人志ら次

秋山よ紅葉ふみ分鳴鹿の声きく時ぞ秋ハかなしさ

題しらず

秋萩にうらびれをれハ葛川の山下とよみ鹿乃鳴らん

妹萩をしからみふせて鳴鹿乃めにハみえずてをとのさやけさ

これさきのみそれ哥の前合にあり

菅原としゆき丸郎下

秋萩の花咲にけり高砂の尾上丸鹿ハいまや鳴らん

むかしあひしりて侍ける人の秋乃野にあひて物かたりしけるついてによめる

みつね

秋萩のふるえに咲る花みれハもとの心ハ忘れさりけり

題しらず

よみ人不知

あさ萩乃下葉色つく今よりや独ある人のいねかてにする

鳴渡る雁乃涙やおちつらん物思ふ宿の萩のうへの露

萩の露玉にぬかんととれハけぬよし見ん人ハ枝なからみよ

ある人のいはくこの哥ハならのみかとの御哥也と

おりて見ハおちそしぬへき秋萩の枝もたはゝにおける白露

萩か花ちるらんをのゝ露しもにぬれてをゆかん小夜はふくとも

これさたのみこの家の哥合によめる

文屋あさやす

秋の野にをく白露ハ玉なれやつらぬきかくる蜘の糸すち

題しらす

僧正遍昭

名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時に

おとこ山にて女郎花を見てよめる

ふるのいまみち

女郎花うしとみつゝそゆきすくるおとこ山にしたてりと思へは

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりハすへし女郎花名をむつましみたひならなくに

題しらす

小野よしき

女郎花おほかる野へにやとりせハあやなくあたの名をやたちなん

朱雀院のをみなへし合によみてたてまつりける

左のおほいまうち君 本院贈太政大臣

女郎花秋の野風にうちなひき心ひとつを誰によすらん

藤原定方朝臣 三条右大臣

秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬ物ゆへ

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

つらゆき

つまこふるしかそなくなる女郎花をのかすむ野の花としらすや

みつね

女郎花吹すきてくる秋風はめにはみえねと香こそしるけれ

たゝみね

人のみることやくるしき女郎花秋きりにのみたちかくるらん

独のみなかめむよりは女郎花わかすむやとにうへてみましを

物へまかりける人の家に女郎花うへたりけるをみてよめる

兼覧王

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿に独たてれは

寛平御時蔵人所のをのこ共さかのに花みんとてまかりたりける時かへるとてみなうたよみけるついてによめる

平さたふん

花にあかてなにかへるらん女郎花おほかる野へにねなましものを

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけし藤袴くる秋ことに野へをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

としゆき

やとりせし人の形見かふち袴わすられかたき香に匂ひつゝ

ふちはかまをよめる

そせい

ぬし志らぬ香こそ匂へれ秋の野にたかぬきかけし藤袴そも

題しらす　平貞文

今よりはうへてたに見し花薄ほに出る秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の哥合の哥

ありはらのむねやな

秋の野の草の袂か花薄ほに出てまねく袖と見ゆらん

素性法師

我のみやあはれと思はん蛬なくゆふかけの山となてしこ

題しらす　よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春は見し秋は色々の花にそありける

もゝ草の花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとかめそ

月草に衣はすらん朝露にぬれてのちはうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時
ふるのたき御らんせんとておはしましけるみち
に遍昭かはゝの家にやとりたまへりけ
る時に庭を秋の野につくりておほむ

物かたりのついてによみてたてまつり
ける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も
まかきも秋ののらなる

古今和歌集巻第五

秋歌下

これさたのみこの家の哥合のうた

文屋やすひて

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山かせをあらしといふらん

草も木も色かはれともわたつ海の波の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる

紀よしもち 淑望

もみちせぬときはの山は吹風のおとにや秋をきゝわたるらん

題しらす

よみ人不知

霧たちて鴈そ鳴なるかたをかの朝の原はもみちしぬらん

神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの杜

千やふる神なひ山の紅葉はに思ひはかけしうつろふものを

貞観の御時綾綺殿のまへにむめの木ありけり

にしの方にさせりける枝のもみちはし

めたりけるをうへにさふらふをのこともの

けるついてによめる　藤原かちおむ　勝臣

おなしえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはしめなりけれ

いし山にまうてける時をとは山のもみちを見て

よめる　つらゆき

秋風の吹にし日より音羽山峰の梢も色付にけり

これさたのみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木葉をちゝにそむらん

壬生忠岑

秋の夜の露をは露とおきなから鴈の涙や野辺をそむらん

題しらす

よみ人しらす

秋の露色ゝにおけはこそ山の木葉のちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

貫之

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色付にけり

秋の歌とてよめる

ありはらのもとかた

雨ふれと露ももらしをかさとりの山はいかてかもみちそめけん

神のやしろのあたりをまかりける時に

いかきのうちのもみちを見てよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

これさたのみこの家の歌合によめる

たゝみね

雨ふれはかさとり山のもみちはゝゆきかふ人の袖さへそてる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人不知

ちらねともかねてそをしきもみち葉ゝ今は限の色と見つれは

やまとのくにゝまかりける時さほ山に霧のたてりけるを見てよめる

きのとものり

たかための錦なれはか秋霧のさほの山へを立かくすらん

これさたのみこの家の歌合のうた

よみ人不知

秋萩はけさはなくらむそれかしのちくそれか葉よそにて也ん

妹乃命とそよめる

坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくもなりにけるかな

人のせんさいにきくにむすひつけてうへける

うた

在原なりひらの朝臣

うへしうへは秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへかれめや

寛平御時きくの花をよませたまうける

としゆきの朝臣

久方の雲の上にてみる菊はあまつ星とそあやまたれける

この哥はまた殿上ゆるされさりける時に

めしあけられてつかうまつれるとなん

これさたのみこの家の哥合のうた

紀とものり

露なからおりてかさゝむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平乃御時きさいの宮の哥合乃哥

大江千里

うへし時花まちとをにありしきくうつろふ秋にあはんとやみし

おなし御時せられける菊合にすはまをつくりて

菊乃花うへたりけるにくはへたりける

ふきあけのはまのかたにきくうへたりける
をよめる　すかはらの朝臣　延長元年復贈位 以前之例姓朝臣書之
秋風の吹あけにたてる白菊ハ花かあらぬか波のよするか
仙宮に菊をわけて人のいたれるかたを
よめる　素性法師
ぬれてほす山ちの菊の露のまにいつか千とせを我ハへにけん
きくの花のもとにて人の人まてるかた
をよめる　とものり
花見つゝ人まつ時ハ白妙乃袖かとのみそあやまたれける
おほさハの池のかたにきくうへたるをよめる
一もとゝおもひし花をおほさハの池乃底にも誰かうへけん
世中のはかなきことをおもひけるおりにきくの
花をみてよめる　つらゆき
秋の菊にほふかきりハかさしてん花よりさきとしらぬ我身を
しら菊乃花をよめる　凡河内みつね
心あてにおらはやおらん初霜乃おきまとハせる白菊の花
これさたのみこの家乃歌合のうた
よみ人しらす
色かハる秋の菊をハ一とせにふたゝひにほふ花とこそみれ

仁和寺にきくの花めしける時にうたそへてたてまつれとおほせられければよみてたてまつりける　平さだふん

秋をゝきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされ

人の家なりけるきくをうつしうへたりけるをよめる　紀つらゆき

咲そめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　よみ人しらず

佐保山のはゝそのもみぢちりぬべみよるさへみよと照す月影

宮つかへひさしうつかうまつらで山さとに

[illegible]

[illegible]

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　よみ人しらす

龍田川にしきおりかく神な月時雨の雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

題しらす　よみ人しらす

大空の月の光しきよけれは影見し水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのの吉野の山にみ雪ふるらし

今よりはつきてふらなん我宿のすゝきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつそけぬらしあしひきの山のたきつ瀬音まさるなり

この川にもみち葉なかる奥山の雪けの水そ今まさるらし

ふるさとは吉野の山しちかけれはひと日もみ雪ふらぬ日はなし

我宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬の哥とてよめる　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そ咲ける

志賀の山こえにてよめる　紀あきみね

白雪のところもわかすふりしけはいはほにも咲花とこそみれ

ならの京にまかりける時にやとれりける所にてよめる

坂上これのり

みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむく成まさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪ハ白浪の末の松山こすかとそ見る

壬生忠岑

み吉野の山の白雪ふみ分て入にし人のおとつれもせぬ

白雪のふりてつもれる山里ハすむ人さへや思ひきゆらん

雪のふれるを見てよめる

凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬみちなれやあとはかもなく思ひきゆ覧

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやふ

冬なから空より花のちりくるハ雲のあなたハ春にやある覧

雪の木にふりかゝれりけるをよめる

つらゆき

冬こもり思ひかけぬを木のまより花とみるまて雪そふりける

やまとのくにゝまかりける時にゆきのふり

けふやまとへくたりてよめる

坂上これのり

朝ほらけ有明の月とみるまてに吉野の里にふれる白雪

題しらす　よみ人不知

けぬかうへに又もふりしけ春霞たちなはみ雪まれにこそみめ

梅花それともみえす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは

このうたハある人のいはく柿本人丸か哥也

むめの花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色ハ雪にましりてみえすとも香をたにゝほへ人のしるへく

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅乃香のふりをける雪にまかひせハたれかことゝくわきておらまし

ゆきのふりけるをみてよめる

紀とものり

雪ふれハ木ことに花そ咲にけるいつれを梅とわきておらまし

ものへまかりける人をまちてしはすのつこもりによめる

凡河内みつね

わかまたぬ年ハきぬれと冬草のかれにし人ハおとつれもせす

としのはてによめる

在原もとかた

あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつつ

寛平御時きさいの宮の歌合の哥

よみ人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる

はるみちのつらき

きのふといひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

哥たてまつれとおほせられし時に

よみてたてまつれる

紀つらゆき

ゆくとしのをしくもあるかなますかゞみみるかげさへにくれぬと思へば

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらす　　　よみ人しらす

わか君は千世にやちよにさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまて

わたつうみの濱のまさこをかそへつゝ君か千とせのありかすにせむ

しほの山さしての礒にすむ千鳥君かみよをはやちよとそ鳴

わかよはひ君かやちよにとりそへてとゝめおきては思ひいてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもなからへて君かやちよにあふよしもかな

仁和のみかとみこにおはしましける時に

御をはのやそちの賀にしろかねを杖に

つくれりけるを見てかの御をはにかはりて

よみける　　　僧正遍昭

ちはやふる神やきりけんつくからに千とせの坂もこえぬへらなり

ほりかはのおほいまうちきみの四十賀九条

の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかふかに

さたときのみこのをはのよそちの賀を

大井にてしける日よめる

きのこれをか　或説云惟岳（のりまさ）　或本用之

かめのをの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世の数かも

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつり（貞保　一品式部卿　清和第二　号南宮　母二条后　延長二年薨）
ける御屏風に桜の花のちるしたに
人の花みたるかたかけるをよめる

ふちはらのおきかせ

いたつらにすくる月日はおもほえて花みてくらす春そすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風に（本康　仁明第七　一品式部卿　号八条宮　延喜元年薨　母従四下紀種子　名虎女）
よみてかきける　　きのつらゆき

春くれは宿にまつさく梅の花君かちとせのかさしとそみる

素性法師

いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためし君にはしめむ

ふしておもひおきてかそふる万代は神そしるらむ我君のため

藤原三善か六十賀によみける

在原しけはる

鶴亀も千とせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはててん

この哥はある人在原のときはるかともいふ

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめにかはりてよみける　　そせいほうし

万代を松にそ君をいはひつる千とせのかけにすまむと思へは

内侍のかミの右大将藤原朝臣の四十賀しけるときに四季の絵かける屏風にかきたりける　満子

（内大臣高藤二女 [illegible] 延喜十七年従二位）

（定国 延喜六年 同年七月薨）

子す経小まつハつゝゆく万代といふハ神もきゝつらん

山高ミ雲ゐに見ゆる桜花心のゆきておらぬ日そなき

夏

めつらしき声ならなくに時鳥こゝらの年をあかすもあるかな

秋

住の江乃松を秋風吹からに声うちそふるおきつ白浪

千鳥鳴さほの川霧立ぬらし山乃木葉も色まさりゆく

秋風に色もちりぬる山ひこのみちもまた風そかくる

冬

白雪のふりしく時はみよしのの山下風に花そちりける

春宮のむまれ給へりける時にまいりて

（文彦太子 保明親王 延喜三年誕生 同年立太子 十六年十月元服 廿三年三月薨）

よめる　典侍藤原よるかの朝臣

峯たかきかすかの山にいつる日はくもる時なくてらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別歌

題しらす　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の峰におふる松としきかはいまかへりこむ

よみ人しらす

すかるなく秋のはきはらあさたちて旅行人をいつとかまたむ

限なき雲ゐのよそにわかるとも人を心にをくらさむやは

小野ちふるかみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心はせきなとゝめそ

さたときのみこの家にてふちはらのきよふ（清生）かあふみのすけにまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる

きのとしさた

けふわかれあすはあふみとおもへとも夜やふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけと春霞たちわかれなは恋しかるへし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

おしむから恋しき物を白雲のたちなむ後はなに心ちせん

ともたちの人のくにへまかりけるに読る
在原しけはる
別ては程をへたつと思へはやかつ見なからにかねて恋しき

あつまへまかりける人によみてつかはしける
いかこのあつゆき
思へとも身をしわけねはめに見えぬ心を君にたくへてそやる

相坂にて人をわかれける時によめる
なにはのよろつを
相坂の関しまさしき物ならはあかすわかるゝ君をとゝめよ

題しらす
よみ人不知
から衣たつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへき物を

この歌はある人つかさをたまはりてあたらしきめにつきて年へてすみける人をすてゝたゝあすなんたつとはかりいへりける時にともかうもいはてよみてつかはしける

ひたちへまかりける時にふちはらのきみとしによみてつかはしける
寵　或本無此名
あさなけに見へき君としたのまねは思ひたちぬる草枕也

きのむねさたかあつまへゆきける時に
人の家にやとりてあかつきいてたつとて
まかり申ししけれは女のよみていたせり
ける　　　　よみ人しらす

えそしらぬいまこゝろみよ命あらは我やわするゝ人やとはぬと

あひしりて侍りける人のあつまの方へまか
りけるをおくるとてよめる

ふかやふ

雲ゐにもかよふ心のおくれねはわかると人にみゆ計也

とものあつまへゆきける時によめる

こもりて侍りけるによめる

藤原関雄　治部少輔五位

奥山のいはかき紅葉ちりぬへしてる日の光みる時なくて

題しらす　　よみ人不知

龍田川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなん

この哥はある人ならのみかと（文武天皇）の御哥なりとなん申

立田川紅葉はなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすかゝはもみちはなかる　此哥不注人丸哥作者有

恋しくはみてもしのはん紅葉ゝを吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへすちりぬるもみちはのゆくゑさためぬ我そかなしき

秋はきぬもみちは宿にふりしきぬみちふみ分てとふ人はなし

ふみ分てさらにやとはむもみち葉のふりかくしてし道とみなから

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみち葉の数をみよとか

吹風の色のちくさにみえつるは秋の木葉のちれはなりけり

せきを

霜のたて露のぬきこそよはからし山の錦のおれはかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみ
ける

僧正遍昭

侘人のわきてたちよるこのもとはたのむかけなく紅葉ちりけり

二条の后の春宮のみやすん所と申ける時に

御屏風に龍田川にもみち流れたるかた
をかけりけるを題にてよめる

そせい

もみち葉のなかれてとまるみなとにはくれなゐふかき浪やたつらん

なりひらの朝臣

ちはやふる神世もきかす立田川からくれなゐに水くゝるとは

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

わかきつるかたもしられすくらふ山木々の木の葉のちるとまかふに

たゝみね

神なひのみむろの山を秋ゆけハ錦たちきる心ちこそすれ

北山にもみちおらむとてまかれりける時

によめる

つらゆき

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉ハよるの錦なりけり

秋の哥

かねみの王

立田姫たむくる神のあれはこそ秋の木葉のぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍りける時もみちを見て

よめる

つらゆき

秋の山もみちをぬさとたむくれハすむ我さへそ旅心ちする

神なひの山をすきて立田川をわたりける

ときもみちのなかれけるをよめる

きよはらのふかやふ

神なひの山をすきゆく秋なれは立田川にそぬさハたむくる

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかせ

白波に秋の木の葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

たつた川のほとりにてよめる

坂上是則

紅葉のなかれさりせハ立田川水の秋をはたれかしらまし

はるみちのつらき

山川に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり

池乃ほとりにてもみちのちるをよめる

みつね

風吹はおつるもみちは水きよみちらぬかけさへ底にみえつゝ

亭子院乃御屏風のゑに川わたらんとする
人のもみちのちる木乃もとにむまをひかへて
たてるをよませ給ひけれはつかうまつりける

立とまりみてをわたらんもみちはゝ雨とふるとも水はまさらし

これさたのみこの家の歌合のうた

たゝみね

山田もる秋のかりいほにおく露はいなおほせ鳥の涙なり

題しらす　よみ人しらす

ほにも出ぬ山田をもるとふち衣いなはの露にぬれぬ日そなき

かれる田におふるひつちのほにいてぬは世をいまさらに秋はてぬとか

北山に僧正へんせうとたけかりにまかれり
けるによめる　そせいほうし

紅葉はゝ袖にこきいれてもていてなん秋は限とみん人のため

寛平御時ふるきうたたてまつれとおほせら
れけれはたつた川もみちはなかるといふうたを

かきてそのおなし心をよみける

おきかせ

深山よりおちくる水の色みてそ秋はかきりとおもひしりぬる

あきのはつる心をたつた川におもひやりてよめる

つらゆき

年ことに紅葉なかす立田川みなとや秋のとまりなるらん

なか月のつこもりの日大井にてよめる

夕月よ小倉の山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

おなしつこもりの日よめる

みつね

よしみねのひてをか

白雲のこなたかなたにたちわかれ心をぬさとくたくたひかな

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲のやへにかさなるをちにてもおもはん人に心へたつな

人とわかれける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかるらん

あひしれりける人のこしのくにへまかりて

としへて京にまうてきて又かへりける

時によめる

凡河内みつね

かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ

こしのくにへまかりける人によみてつかはしける

よそにのみ恋やわたらん白山の雪みるへくもあらぬ我身は

おとはの山のほとりにて人をわかるとてよめる

つらゆき

おとは山こたかくなきて郭公君か別をおしむへらなり

藤原のちかけかからもののつかひに長月のつこもりかたにまかりけるにうへのをのこともさけたうひけるついてによめる

藤原かねもち 兼茂 延喜元年参議

もろともになきてとゝめよきりきりす秋の別はおしくやはあらぬ

平もとのり 元規 蔵人大忠封

秋霧のともに立いてて別なははれぬ思ひに恋や渡らん

源のさねかつくしへゆあみむとてまかりける時に山さきにて別おしみける所にてよめる

しろめ

命たに心にかなふ物ならはなにか別のかなしからまし

山さきより神なひのもりまてをくりに人くまかりてかへりかてにして別おしみけるによめる

源さね 右近少将実

人やりのみちならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん

今はこれよりかへりねとさねかいひけるおりに
よみける　藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかゝむさしのすけにまかり
ける時におくりにあふさかをこゆとてよみける
つらゆき

かつこえてわかれもゆくかあふさかは人たのめなる名にこそありけれ

おほえのちふるかこしへまかりけるむまの
はなむけによめる

藤原かねすけの朝臣

君かゆくこしのしら山しらねとも雪のまにまにあとはたつねん

人の花山にまうてゝゆふさりつかた
かへりなんとしけるときによめる
僧正遍昭

夕くれのまかきは山とみえなゝんよるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人々わかれ
けるついてによめる
幽仙法師

わかれをは山の桜にまかせてんとめんとめしは花のまにまに

うりんゐんのみこの舎利会に山にのほりて
かへりけるに桜の花のもとにてよめる
僧正へんせう
山風に桜吹まきみたれなん花のまきれに立とまるへく
幽仙法師
ことならは君とまるへくにほはなんかへすは花のうきにやはあらぬ
仁和のみかとみこにおはしましける時にふるの
滝御らんしにおはしましてかへり給ひ
けるによめる
兼芸法師
あかすしてわかるゝ涙滝にそふ水まさるとやしもはみゆらん

かんなりのつほにめしたりける日おほみき
なとたうへて雨のいたくふりけれは夕
さりまて侍りてまかりいてける折に
さかつきをとりて　つらゆき
秋萩の花をは雨にぬらせとも君をはましておしとこそ思へ
とよめりける返し
兼覧王
おしむらん人の心をしらぬまに秋の時雨と身そふりにける
かねみのおほきみにはしめて物かたり
してわかれける時によめる

こゝ祢

わか里とて行くともあらこゝろひとつおもひみだるゝなさけかな
思しらす　よ見ん人へゑし次
おもひてわかるゝ袖の白玉と君か形見とはみえなゆ
限なくとふ波よそからぬ袖ハかはらなん日まてに
かさこしとふかん表面よねまこさせて君をあ
しめそもへとゞめん横花これとゆくふまて道
しるの山こえなくいしぬれりとまて物いひ
けるひとの別をおしまれにあつ
作し給へ

はふよ思ふにこゝろ山のぬれそても今は別なるれ
なよあらりける人のくる夜よ物といひつき
てまゐれ君か宿にありあつ
とこなり
しつのおもひなかるゝしわかるともなめり
ともかうへとそよ

古今和歌集巻第九

羈旅哥

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

この哥はむかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうでこざりけるをこのくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなんとていでたちけるにめいしうといふところのうみべにてかのくにの人むまのはなむけしけり夜になりて月のいとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝながされける時に舟にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける

小野篁朝臣

わたの原やそ嶋かけて漕出ぬと人にはつげよあまの釣舟

題しらず　よみ人しらず

都出てけふみかの原いづみ川川風さむし衣かせ山

あかしの浦の朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

このうたはある人のいはくかきのもとの
人まろか哥也

あつまの方へともとする人ひとりふたりいさ
なひていきけり三河の国やつはしといふ
所にいたれりけるにその川のほとりにかき
つはたいとおもしろくさけりけるを見て木
のかけにおりゐてかきつはたといふいつもしを
くのかしらにすゑて旅の心をよまんとて
よめる　在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあれははる〳〵きぬる旅をしそ思ふ

むさしのくにとしもつふさとの中にある
すみた川のほとりにいたりてみやこのいと
恋しうおほえけれはしはし川のほとりにおり
ゐておもひやれはかきりなくとをくもきにけ
るかなとおもひわひてなかめをるにわたしもり
はや舟にのれ日くれぬといひけれは舟
にのりてわたらんとするにみな人ものわひ
しくて京に思ふ人なくしもあらすさる
おりにしろき鳥のはしとあしとあか

その川のほとりにあそひをり京にはみえ
ぬ鳥なりけれはみな人見しらすわたし
もりにこれはなに鳥そとゝひけれは
これなん宮こ鳥といひけるをきゝてよめる

名にしおはゝいさことゝはん宮こ鳥わか思ふ人はありやなしやと

題しらす　よみ人不知

北へ行雁そ鳴なるつれてこしかすはたらてそかへるへらなる

この哥はある人おとこ女もろともに人の
くにへまかりけりおとこまかりいたりて
すなはち身まかりにけれは女ひとり京へ
かへりけるみちにかへるかりのなきけるをきゝ
てよめるとなんいふ

あつまの方より京へまうてくとてみち
にてよめる　おと　壬生ますなりむすめ

山かくす春の霞そうらめしきいつれ宮このさかひなるらん

こしのくにへまかりける時しら山をみて
よめる　みつね

きえはつる時しなけれはこしちなるしら山の名は雪にそ有ける

あつまへまかりける時みちにてよめる
つらゆき

いとにうち捨ちなく小別かちの心かくしもなりたるかな
うひのくにへまかりける時みちにてよめる
兼河祢
よそさむくなりて初霜とおきける草の枕よおきまさる
ゆきまれくふのみやへまかりける時よふるさとみ
のうとのふ雨よとゝまりて中ふしけるをみ
まいひたるへけるふとりふあかりけるへ
とよみきこつくによめる
ゆきつかれも祢ちけ
夕月秋おほつかなさと出てけふのこのうらはおきそみる
これなうの見えこれよりふかりにまかり侍るに
時よおまの川とふ所のうちにみえかとる里
ありあり井てさけなとのさけつゝく
まみこのいとひなくくるてはたの
かうにいくらやいふんとよみくさる月
いはるとひけましよめる
なりきしのあたり
かしこしとすつあふやとうるんおまみたる小秋はさびり
見こしせことをそしよみけり世しえ世き
なりふなれしとりふ結てよめる

きのありつね

一とせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそおもふ

朱雀院のならにおはしましたりける
時にたむけ山にてよみける

すかはらの朝臣

このたひはぬさもとりあへすたむけ山紅葉の錦神のまにまに

素性法師

たむけにはつゝりの袖もきるへきにもみちにあける神やかへさん

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

ほとゝきす

くへきほとときすきぬれやまちわひてなくなる声の人をとよむる

うつせみ　在原しけはる

浪のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからむや

返し　壬生忠岑

袂よりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ　よみ人しらす

あなうめにつねなるへくもみえぬかな恋しかるへき香はにほひつゝ

かにはさくら　つらゆき

かつけとも浪のなかにはさくられて風吹ことにうきしつむ玉

すもゝの花

今いくか春しなけれはうくひすも物はなかめて思ふへらなり

からもゝの花　ふかやふ

あふからも物はなをこそかなしけれわかれん事をかねて思へは

たちはな　をのゝしけかけ

足引の山たちはなれゆく雲のやとりさためぬ世にこそ有けれ

をかたまの木　とものり

みよしのゝ滝にうかひ出るあはをかたまのきゆとみつらん

やまかきの木　よみ人しらす

秋はきぬいまやまかきのきり／＼すよな／＼なかむ風のさむさに

あふひ　かつら

かくはかりあふひのまれになる人をいかゝつらしと思はさるへき

人めゆへのちにあふひのはるけくはわかつらきにや思ひなされん

くたに　僧正へんせう

ちりぬれはのちはあくたになる花を思ひしらすもまとふてふかな

さうひ　つらゆき

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかり
けり
なそらへし　ともあり
白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にもいとをみなへし
錦やとまけそめちらむとしとその山をとらへてあらむ
朱雀院のをみなへしあはせ時によみてたてまつる
とのふかりしとくのうしらふかきそてあり
法しゆき
なくしはるの雨あらしに明暮の木のしん漿をとふへそさき
さきちる花　ともあり
あさちふはなりふそり白露のをけつ草ハものすさめり

志をとふ　よみ人不知
梅のへていさぶらさの花くとにとふかひそふるは
つるしたんのも　ともあり
我宿の花ふみしたくとりうたん野はなけれはやこゝにしもくる
なくもれ　よみ人しらす
おりとみてたのむそらことさらつさそれなさはしとやさわらひてん
けふこし　凡河内躬恒
らつきにしとや花のいろとらんなく白露のそむかりと
二条の后春宮のみやすむ所と申ける時に
めとにけつり花させりけるをよませ給ひける

文屋やすひて

花の木にあらさらめともさきにけりふりにしこのみなる時もかな

しのふくさ　紀のとしさた

山高みつねにあらしのふく里はにほひもあへす花そちりける

やまし　平あつゆき

時鳥峰の雲にやましりにしありとはきけとみるよしもなき

からはき　よみ人しらす

空蝉のからは木ことにとゝむれと玉のゆくへをみぬそかなしき

かはなくさ　ふかやふ

うは玉の夢になにかはなくさまむうつゝにたにもあかぬ心を

さかりこけ　たかむこのとしはる

花の色はたゝひとさかりこけれとも返々そ露はそめける

にかたけ　しけはる

いのちとてつゆをたのむにかたけれはものわひしらになく野への虫

かはたけ　ふかやふ

さよふけてなかはたけゆく久方の月吹かへせ秋の山風

わらひ　しんせいほうし

煙たちもゆともみえぬ草の葉をたれかわらひとなつけそめけん

さゝ　まつ　ひは　はせをは　きのめのと

いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人にみえつゝ

なし　なつめ　くるみ

兵衛　おほきさいのみやに侍ける

あちきなしなけきなつめそうきことにあひくる身をはすてぬ物から

からことゝいふ所に春のたちける日よめる

安倍清行朝臣

波の音のけさからことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらん

いかゝさき　かねみのおほきみ

かちにあたる波のしつくを春なれはいかゝさきちる花とみさらん

からさき　あほのつねみ　阿保經覧

かのかたにいつからさきにわたりけん波ちはあともゝのこらさりけり

伊勢

波の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらん

かみやかは　つらゆき

うはたまのわかくろかみやかはるらん鏡の影にふれる白雪

よとかは

足引の山へにをれは白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

かたの　たゝみね

夏草のうへはしけれるぬま水のゆくかたのなきわか心かな

かつらのみや　源ほとこす　忠

秋くれと月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすはかりを

百和香　　よみ人不知

花ことにあかすちらしゝ風なれはいくそはくわかうしとかは思ふ

すみなかし　　しけはる

春霞なかしかよひちなかりせは秋くるかりはかへらさらまし

おき火　　みやこのよしか

なかれいつる方たにみえぬ涙川おきひむ時やそこはしられむ

ちまき　　大江千里

のちまきのおくれておふるなへなれとあたにはならぬたのみとそきく

はをはしめるをはてにてなかめをかけて

時のうたよめと人のいひけれはよみける

僧正聖宝

花のなかめにあくやとてわけゆけは

心そともにちりぬへらなる

以下
3丁
白紙

一
古今和歌集 上下
後撰和歌集 上下
拾遺和哥集 上下
後拾遺和歌集 上下
二
金葉和歌集
詞花和歌集
千載和哥集 上下
新古今和哥集 上下
三
新勅撰和歌集 上下
續後撰和哥集 上下
續古今和歌集 上下
續拾遺和歌集 上下
四
新後撰和歌集 上下
玉葉和哥集 上中下
續千載和歌集 上中下
續後拾遺和哥集 上下
風雅和哥集 上中下
新千載和歌集 上中下
六
新拾遺和歌集 上中下
新後拾遺和哥集 上下
新續古今和哥集 上中下